

經濟論叢

第七十五卷 第一號

流 民 考……………穂 積 文 雄 (1)

蒙古民族の社會經濟史的一考察……………伊 藤 幸 一 (21)

陶磁器業の産業革命（瀬戸と名古屋）……三 島 康 雄 (39)

クチンスキー「1800年から1946年に至る

ドイツ經濟の動き」……………大 藪 輝 雄 (61)

〔昭和三十年一月〕

京都大學經濟學會

J・クチンスキー

「一八〇〇年から一九四六年に至るドイツ經濟の動き」

Jürgen Kuczynski ; Die Bewegung der deutschen Wirtschaft von 1800 bis 1946, zweite durchgesehene und erweiterte Auflage, 1948, Westkultur-Verlag
Anton Hain, Meisenheim am Glan, 217 Seiten.

大 藪 輝 雄

I

本書は、十六回に亘る連續講演の草稿からなっている。それは、一八〇〇年―一九四六年のドイツ經濟史の、「運動の動態、主要潮流と反對潮流を、大膽な筆致で特徴づけることを課題としている。」(序文)だから、著者もいさように、多くの問題の詳細な敘述は見られない。また、個々の問題の新しい研究を提供するものでもない。ただ全く新しく、マルクス主義的立場からドイツ近代經濟史の通史を書くところである。

「一八〇〇年から一九四六年に至るドイツ經濟の動き」

註

クチンスキーは、學ぶべきものとしてマルクス、エンゲルス、メーリンクをあげ、今迄の研究史に次のような評價を下す。「我々は、ドイツ經濟史の研究において、アレクサンダー・フォン・フンボルト、モムゼンに、シュロツサ、ゲルフィヌス、フオンターネに、誰を比べることができるだろうか？ 多分、華々しくて非科學的なゾムバルトを、か？ あるいは、詰らないボーレを、か？ プレンターノ、シュモラー、R・クチンスキー、クナッパ其他は、價值ある個々の勞作を提供したが、一般的概観は與えなかつた。クノ

「は、若干の空疎な俗流マルクス主義的定式をもつ幼稚な概説書を、うわべだけを飾つて提供した。……我々は全く新しく始めなければならぬ。その際、我々は礎石や隅柱として、ドイツ經濟史に對する社會主義の指導者の、僅かであるが非常に價値のある勞作を使用しよう」(S. 1)

本書の特色としては、まず、ドイツ經濟史研究に對する、著者のすぐれて實踐的な態度をあげることができよう。彼は、第一講「何故我々はドイツ經濟史を研究するか？」において、ドイツ經濟史研究が、まず、「平和的で民主的な經濟建設に必要な經驗の泉」(S. 6)となることを示している。そのためには、それはできるだけ客觀的に敘述されなければならない。ただし自己の感情や創意を敘述に入れるならば、それから學ぶことはできないからである。しかし、徹底的に研究する價値のある對象の選擇や、それに下す判斷においては、リアリティックに主體的でなければならぬ。だが、その選擇の基準は決して恣意的なものではない。「我々にとつて、何が重要であるかを選択する唯一つの尺度、我々が歴史を觀察する唯一つの視角をしか、我々は認めないであらう。それは自由で平和な、眞に民主的で進歩的なドイツの經濟的建設である」(S. 6)

ドイツ經濟史研究の意義はそれだけではない。人類史は、經濟力及び人間精神、我々の生活の物質的ならびに觀念的基礎の發展過程であるが、ドイツ經濟史研究は、その中の我々の位

置を明らかにし、我々の課題が何であるかを認識せしめる。クテンスキーは、ドイツ經濟史研究にこのような二つの極めて實踐的な意義を認め、非常にやさしい表現で講演を進めている。

第二の特色としては、單に經濟過程の敘述のみでなく、上部構造としての政治過程の分析を、經濟の基礎の上に與えようとしていることをあげることができる。政治における闘争は經濟過程によつて規定された階級對立の反映なのであるから、經濟史は、本來政治經濟史でなければならない。とくに、實踐的立場から經濟史を研究しようとするクテンスキーの態度からは、それは當然であるといえよう。

II

前述の如く、本書は特殊問題についての新しい研究を提供するものではない。だからクテンスキーがどのように時代區分し、そこで種々の問題をどのように位置付けているかが、むしろ重要であると思われる。従つて、彼の特徴ある見解——外延的(extern)生産—搾取方法の行われる初期産業資本主義(Der frühe Industriekapitalismus)と内充的(intensiv)生産—搾取方法の行われるドイツ資本主義の第二期(Die zweite Periode des deutschen Kapitalismus)に産業資本主義に分つこと——の示されている前半の内容を、簡単に紹介しようと思う。まず、目次はつぎのようになつてゐる。

(4) 何故我々はドイツ經濟史を研究するか？ (1) 一八〇〇年頃

のドイツ經濟（封建制度の没落と國家不統一） (2) 經濟革命

（一八〇七） (3) 進歩と反動（一八四〇） (4) 一八四八年革命の政治

經濟的前史 (5) 初期産業資本主義の終焉（一八四八） (6) ドイツ

資本主義の第二期への移行（一八七〇） (7) 第一級の資本主義國

ドイツ（一八七〇） (8) 獨占資本主義、第一段階（一九〇〇） (9)

戰爭、革命及びインフレーション（一九一四） (10) 生産設備の近

代化とファッシズムへの發展（一九三三） (11) ファッシズム經濟

の構造 (12) ファッシズム經濟（一九三三） (13) ファッシズム經濟

（一九四五） (14) 「新秩序」（一九四五） (15) 新ドイツ經濟建設の問

題

紙面の都合上、本稿での紹介は第七講までとする。後半、特にファッシズム經濟の詳細で興味ある敘述（全體の約四分の一をなしている）は、本書の特色の一つであるが、残念乍ら割愛せざるを得ない。

著者の研究態度を示した第一講に續き、第二講一八〇〇年頃のドイツ經濟（封建制度の没落と國家不統一）においては、生産諸力發展の桎梏と化した、没落しつつある封建制度の、社會經濟狀態の概観があたえられる。貴族は腐敗し、農奴はますます奴隸的狀態に近ずいた。都市手工業者は獨占化したツンフトに組織されていた。他方ドイツは、多數の關稅國に分裂して、

それが經濟的發展に對する強い障害をなしていた。彼が敘述の重點を、現代に置いたためとも考えられるが、ここでは、没落しつつある封建經濟に對應して、その胎内に發芽するブルジョアの發展の分析、封建經濟より資本主義經濟への移行過程の分析が不十分であると思われる。

第三講經濟革命（一八四〇）では、上からの諸改革が示される。フランスの占領に刺戟されて、プロシヤにも進歩の運動が始まる。生産諸力に自由な發展を確保するためには、封建的桎梏は打破されなければならない。まず、シュタイン・ハルデンベルクの改革によつて、農奴は解放された。しかし、上からの改革であつたため、土地は却つてユンカーに集積された。つぎに手工業においては、プロシヤでは、一八〇八年の「營業條令」によつて、營業自由に對する礎石が置かれ、ツンフト強制が廢止された。ここでクチンスキーは、ツンフト強制の廢止を、必要な手段として示すのは正しいが、決定的な重要性を持つ偉大な行爲というのはゆきすぎだとして、「營業自由は、工場やマニュファクチュアにとつては非常に重要であつた。それは、手工業の場合に、ドイツの經濟的發展一般にとつてあまり決定的ではなかつた。」（p. 88）といつてゐる。プロシヤのこの方策より重要な意義を持つものとして、彼は、バイエルン（1807）其他における國內關稅の廢止をあげる。それは西南ドイツに起つたため、一般に、官製のドイツ經濟史ではほとんど注意され

なかつたが、後の關稅同盟への第一歩として重要である。

このような經濟革命は、政治革命なしに遂行された。封建的エンカーは新しい諸關係に適應し、資本主義的生産方法に移行した。また、工業の領域における諸方策は、手工業のみでなく、鑛山業、工場及びマニユファクチュアを自由に發展せしめた。かくて、「資本主義的生産方法の廣い基礎の上での適用の端緒」(S. 88)がこの時期にあたえられ、次の時期において、それは「正當な展開」(S. 88)にまで達する。

第四辯進歩と反動(一八四〇年)では、封建的國家關係(反動)の下に、資本主義的(進歩)に經營される、半封建的なドイツについて述べている。農業における世襲農制(Erbunterthan, Ⅱ. 88)の廢止とエンカーのための土地改革、農業労働者の創造とエンカー的大土地所有の新編成は、土地の資本主義的經營のための基礎をあたえた。同時に、生産諸關係の變化は技術的進歩に對する動因をあたえ、農業生産力は増大した。農業に於ける生産諸關係の變革が、全く一般的にドイツにおける資本主義を急速に擴大せしめたとすれば、一八三四年に一應の完成をみた關稅同盟の形成は、工業資本主義發展の基礎を置いた。

ここでクチンスキーは、初期産業資本主義について述べる。それは大體一八〇〇年—一八六〇年の期間で、そこでは外延的生産—搾取方法が行われる。すなわち總労働者數を多くし、労働時間を長くすることによつて、資本主義は生産を増加する。

その結果労働者は悲慘な状態に陥る。

次に彼は、ドイツでも消費手段生産部門から資本主義化が始まり、生産手段生産部門に波及したことを示している。

第五講 一八四八年革命の政治經濟的前史

一八四八年革命は、二重の危機に基づく二つの闘争によつて特徴づけられる。一つは、フィンランドを中心にして發展した工業資本主義的ブルジョアジーが、オスト・エルベに根據を持ち、封建的に支配していたエンカーと、國家權力をめぐる闘争した。それはブルジョア革命の課題であつた。第二の闘争は、今迄の外延的生産—搾取方法では、資本主義はそれ以上發展せず、労働者階級の生存を確保できなかった、ということに基づいていた。労働時間は長くなり、實質賃金は低下し、労働者は悲慘な状態にあつた。彼等は自からの生存のために闘つた。この二つの闘争の中心は、相互に切離されていたのではない。それが統一した一つのものがあつた。それは帝國統一への努力であつた。その上に、とくに困難であつた周期的恐慌が加わる。それは不作と同時に起つたためにとくに甚しかつた。

大衆の貧困は一連のストライキに導いた。一八四八年以前の最大の暴動は、シュレジエンにおける織匠の暴動である。また、ブルジョアジーとエンカーとの闘争は、財政問題と絡み合つていた。ヨーロッパにおける革命は、まず、一八四八年二月フランスに起つた。そこでの闘争は、小ブルジョアジー・労働者

階級と大ブルジョアジーとの闘争であつた。フランスを見たドイツブルジョアジーは、そこで労働者階級が演じた役割に恐怖を感じた。彼等は自分達のエンカーに對する闘争をあまり徹底的におこなうならば、大衆はそれを利用し、その結果、かえつて自分達の地位が危うくなることを心配した。だからブルジョアジーは、三月に用心深くためらいながら革命に入つた。革命の経過において、ブルジョアジーと労働者階級はいくつにも分裂した。そして、結局半封建的エンカーが、闘争の勝利者となつた。

ここでは、革命の原因と経過が、經濟過程の基礎の上に明瞭に分析されている。

第六講初期産業資本主義の終焉(一八四八)では、革命の結果、結局二つの危機が引延ばされたことが示される。

「昨日の權力は、また今日の權力である。」とエンゲルスはいう。三つの階級が衝突した。しかし間もなく、すべては元の儘であつた。それでは、革命にまで發展した危機は、どのように解決されたのであろうか？ 第一に、ドイツブルジョアジーは、若干の經濟的利益のために彼等の政治的自由を賣つた。貴族は以前の如く無制限に支配した。プロシャは依然として、經濟は資本主義的であるが、政治は身分制的になされる半封建的國家であつた。そして、この危機は一九一八年まで引延ばされた。

第二の危機は、一八五七年恐慌の後に至るまで引延ばされた。ドイツの革命はフランスの二月革命に刺戟されて起つたため、革命が起つた時、第二の危機はまだその最高點に達していなかつた。外延的生産—搾取方法の効果は、まだ使い盡されていなかった。すなわち、同一馬力の機械の使用を擴大するという、半分外延的で半分内充的な方法を使用して、五〇年代は非常な經濟的膨脹を経験し、銀行の設立、工業、交通、商業の發達等つぎの十年間の發展の基礎を置いた。

チンスキーは、機械使用のこの擴大を過大評價すべきでないとして、「それは資本主義の歴史における、新しい時代では決してない。それはまだ、外延的搾取方法から内充的搾取方法への移行を現わさない。」(S. 66)といつてゐる。

彼の外延的生産—搾取方法の時期(一八〇〇)には、マニユファクチュア段階の後期と、工場段階の初期とが含まれるように思われる。だが、彼はこの區別をしていない。しかし、生産力發展の見地から明らかに分つべきマニユファクチュア段階と工場段階を、外延的生産—搾取の時期として一括すること、あるいは、マニユファクチュア段階を認めないことはどうであらうか？

第七講ドイツ資本主義の第二期への移行(一八六〇) 六〇年代は、ドイツの一般史においても經濟史においても決定的な意味をもつてゐる。ここで資本主義の新しい時期—内充的生産

及び搾取の時期——があらわれ始め、他方、國家統一運動が進行する。

彼はまず、ドイツ統一に對する各階級の態度を特徴づけ、統一がビスマルクによつて上からなされたことを述べた後、産業資本主義の第二期への移行について書いている。ドイツの統一が上から起つた如く、初期産業資本主義の生産—搾取方法の根本的矛盾は上から解決された。それがフランスでは一八四八年革命において（十二時間法）、英國ではチャーチスト運動で解決されたとすれば、ドイツでは大衆の強い參與なしに、^(註)上から、一般的經濟諸關係の壓迫の下に^(註)（p. 8）内充的工業生産様式に移行した。人々は、時間當り労働者の仕事の量を増大する努力をした。資本主義が將來生産を増大させる三つの方法がある。すなわち機械の改良、労働過程の整備、労働強化。生産方法のこの變革は、また、搾取方法の變革を要求した。労働時間の短縮、實質賃銀の上昇、教養ある労働者の養成がこれである。この内充的生産—搾取方法は、生産諸力の急速な發展、大經營の創造、資本の集積及び重工業の發展をもたらした。

同時に労働運動に變化が起つた。第一に、労働者を都市と大經營に集めることは組織と宣傳を容易にした。第二に、労働時間の短縮は集會を容易にした。第三に、教養の増大は宣傳方法としての新聞、雑誌、パンフレットの利用を可能ならしめた。これは、第二期の基礎の上にのみ可能であつた。ブルジョアジ

ーがプロレタリアートにおいて自からの臺掘人を創り出した如く、資本主義の新しい搾取方法によつて、搾取者との闘争に勝つたための武器があたえられた。ここでは、労働運動における變化が、彼の第二期の基礎から明瞭に説明されている。

註 「上から」が如何なる過程を示すかは、はつきりとは述べられていない。

（一九五四・一〇・二八）

〔附記〕 本稿を印刷に回した直後に、高橋正雄、中内通明兩氏による、本書のすぐれた翻譯（有斐閣刊）に接することが出来た。なお、その後にあらわされた「一七八九年から現在に至るまでの労働者の狀態の歴史」（Die Geschichte der Lage der Arbeiter in Deutschland von 1789 bis in die Gegenwart, Bd. I, 1. Teil, 6te, verbesserte Auflage, 1954.）においては、第一編初期産業資本主義段階（一七八九—一八五〇年）となつていて、本格的に産業革命の始まる五〇年代は轉換期に入れられている。